

はなかろうか。そのようなとき、多様化の方向のみが進んでしまつては困る。多様化のなかで、相互に学びあい理解しあうことが必要である。

合意形成技術は、その相互啓発による学習過程の効率化をはかるものであり、その存在意義は今後なおいっそう高まっていくであろう。今回は、私の周辺で開発、実用化され、効果をあげたものにしばって示した。これ以外にも注目すべき技術であることは確かである。それらについては、機会を改めて紹介することとした。

最後に、今回示した合意形成技術の背後には、ブラックボックス排除の考えがあることを強調しておきたい。合意形成の際、自分たちの意見の構造化が、参加者（大衆）にとって得体の知れない“技術”によってなされる場合を考えてみよう。それは合意形成にマイナスの効果こそあれ、プラスの効果はないであろう。その点を配慮し、小・中集団におけるラベル化による構造化も、大集団におけるワイヤレス・アナライザーでも、参加者の直観により理解できる種類の技術に限定して開発・利用を進めたのである。この思想の徹底こそが、特定意図のもとでの合意形成の危険を防ぐ歯止めのひとつになると考えているのである。

## 注

- 注1) 丹羽富士雄・司馬正次：オペニオン・テクノロジーの展望，オペレーションズ・リサーチ，25巻8号（1980年）pp.509-512
- 注2) ハイ・プレートは、筑波大学丹羽富士雄氏が考案し、日本ビジネス・サブライ社が、同氏の助言のもとに商品化したものである。
- 注3) QC手法開発部会編：新QC七つ道具，日科技連，1979年，新QC七つ道具研究会編：新QC七つ道具の企業への展開，日科技連，1981年
- 注4) 栗山，司馬，丹羽，渡辺，小林：小型ワイヤレス・レスポンス・アナライザーの開発，日本科学教育学会年会報，1981年，pp.179-180
- 注5) 司馬正次，小林博道，阿部昌信：DAViKシステムによる北・北海道の地域発展ゴール形成，オペレーションズ・リサーチ，25巻8号（1980年）pp.486-491
- 注6) 司馬正次：ビデオが変える町の生活，日本経済新聞，昭和55年10月13日号第24面。なお、このプロジェクトは、司馬の他、栗山克美，小林博道，丹羽富士雄（筑波大学），阿部昌信（北海道寒地建築研究所），筑波大学学生4名で行なったものである。
- 注7) このプロジェクトはQCサークル茨城地区の幹事の方たち（幹事長 田尻隆二郎）と筑波大学司馬研究室との共同で行なったものである。

## 昭和56年度論文審査委員

昨年度投稿論文の審査委員は次の方々でした。本学会論文誌のレベルを維持するために多大のご貢献をいただいたことを厚くお礼申し上げます。（編集委員会）

阿部俊一，阿部 統，青木兼一，伊理正夫，生田誠三，石井博昭，飯田孝久，茨木俊秀，岩本誠一，稲垣敏之，卜部舜一，小田中敏男，小河原正己，尾崎俊治，大内 東，大山遼雄，加瀬滋男，加藤直樹，加納 悟，河合 一，木瀬洋，岸 尚，熊谷道一，蔵野正美，栗栖 忠，古林 隆，児玉正憲，今野 浩，権藤 元，坂口 実，阪田省二郎，逆瀬川浩孝，志水清孝，司馬正次，島田俊郎，嶋田正三，鈴木武次，鈴木久敏，反町迪子，高橋幸雄，高橋 豊，竹内 啓，竹田英二，刀根 薫，中井暉久，中村義作，中村善太郎，中森真理雄，鍋島一郎，成久洋之，西田俊夫，西野吉次，西村彰一，橋田 温，鳩山由紀夫，原野秀永，福島雅夫，藤沢武久，藤重 悟，伏見正則，古川長太，真壁肇，真鍋龍太郎，牧野都治，松田武彦，三浦大亮，宮崎茂次，宮沢政清，武藤滋夫，室田一雄，本告光男，森 雅夫，森戸 晋，森村英典，柳井 浩，山下 浩，山本正明